

次に高知県の代表的な渇水・利水に関する防災風土資源の事例を2つ選び、以下に述べる。

## イ) 高知県の代表的な渇水・利水に関する防災風土資源の事例

### ① 扇の要であった山田堰跡（香美市）（表6の番号4）

四国の川との関わりで、とりわけ大きい功績を残したのは、野中兼山である。兼山は、元和元年（1615）姫路で生まれ、4歳で土佐に移り、土佐藩家老野中家を継いだ。17歳で奉行職について以来30年以上もの間、土木、港湾、山林行政や地場産業の育成などに奔走した。特に、物部川での新田開発は、土佐の発展に大きく寄与している。

物部川は河床が低く、流域には、**写真1**のように灌漑の難しい河岸段丘が広がっている。兼山はこうした荒れ地を灌漑するために、物部川の扇状地が広がる扇の要の場所に大規模な堰を築いて、縦横に用水路を建設した。25年の歳月をかけて長さ327m、幅11m、高さ1.5mの山田堰を建設し、同時に右岸側に上井（かみゆ）、中井（なかゆ）、下井（しもゆ）（**写真2**）、左岸側に父養寺井（ぶようじゆ）の用水（**写真3**）を導き、1700町歩もの広大な新田を開発した。



写真1 山田堰跡と物部川の扇状地 写真2 右岸用水（下井） 写真3 左岸用水（父養寺井）

これが、現在、高知県最大の穀倉地帯になって香長平野（**図1**）を潤してきたが、昭和48年、上流に合同堰が完成してお役御免となり、現在は史跡（**写真4**）として一部が高水敷に**写真5**のように保存されている。**図2**は、山田堰堀川三百年史の付図にある明治後期における山田堰の改修平面図である。また下井（しもゆ）は、舟入川となって、**写真6**のように高知の国分川まで流れ、江戸時代の重要な舟運としての役割を果たした。

野中兼山は、現在でも土佐を作った男として有名で、その銅像が、大豊町本山の帰全山公園に**写真7**のように建立されている。



図1 合同堰のかんがい区域 写真4 高知県指定史跡の現地看板 図2 明治後期の山田堰改修図



写真5 高水敷に部分保存の山田堰 写真6 舟入川から物部川を望む 写真7 帰全山公園の野中兼山像

《得られる知恵・教訓》

野中兼山という偉大な先人の努力により造られた山田堰等により、物部川の下流域（現在の香長平野）が発展したことを教えている。

② 八田堰（いの町）（表6の番号5）

仁淀川の河口から9kmほど遡った場所に八田堰（はたぜき）（写真1）がある。仁淀川の流れを遮る最初の構造物となっている。この堰は、土佐を作った男、土佐藩の家老、野中兼山（1615～1664）によって、慶安元年（1648）に造られた歴史が古い堰である。現在、八田堰はコンクリートにより近代的に改修されているが、元々の兼山遺構の八田堰は湾曲斜め堰で、施工にあたっては流水との調和を図るため川に綱を張り、流水による綱のたわみぐあい調べて堰の方向や形状を決めたといわれている。また堰が湾曲した形状や現在の堰構造が堰全体が魚道として魚が遡上しやすい多自然型の堰としても注目されている。

兼山は17歳で奉行職について以来30年以上もの間、土木、港湾、山林行政や地場産業の育成などに奔走した。特に、物部川や仁淀川での新田開発は、土佐の発展に大きく寄与している。兼山は仁淀川でも堰（八田堰（写真2）、鎌田堰（現在は撤去されているが写真3の位置にあった））を築き流域一帯に新田を開発した。



写真1 八田堰の写真

写真2 9km 付近の八田堰

写真3 鎌田堰があった位置

仁淀川最大の堰は、延長 415m、幅 25m の八田堰で、5年がかりの難工事で完成させた。ここで堰止められた水は、左岸の「弘岡用水」に落とされ、弘岡平野の荒廃した 1253 町歩を水田化し潤した。今では施設園芸が盛んな高知市春野町一帯の農業基盤を形成している。この用水路（図1）は、伊野と春野の町境に立ちふさがる行当（ゆきとう）の崖を削って造られ、新川の集落を抜けると、

元春野町役場、唐音の切抜の水門、第 34 番札所種間寺の横を流れ、高知市に入ると第 33 番札所雪蹊寺のそばを通過して浦戸湾に注いでいる。

水路は川舟の往来にも使われ、“運河”の役割も果たしていた。古い町並みが残る新川の集落は、物資の集散地として大きくなったと言われている。兼山は重労働の治水工事に、長宗我部の遺臣たちを起用した。藩の兵農分離策で農民になっていた彼らは郷土にとりたてられると不満をやわらげ、先頭に立って新田開発に活躍した。このあたりに兼山の手腕が光るが、あまりに厳しい施策に非難の声が高まり、寛文 3 年（1663）権力の座を追われ失職、3 か月後に急死する不遇の生涯を終えた。遺族も 40 年も宿毛に幽閉される悲劇を生んでいる。この時の野中兼山の四女、婉（えん）の物語が大豊町本山出身の大原 富枝（おおはら とみえ）の小説「婉という女」で有名になった。また女優岩下志麻が、凜とした女を演じた 1971 年、今井正監督の映画「婉という女」が当時、話題になった。その父、兼山の銅像が、所領していた大豊町本山の帰全山公園に工事図面を手にして立っている。《得られる知恵・教訓》

堰構造などの工夫に学ぶことや八田堰や用水路は今も立派に機能して、現在の高知県発展の礎となったことを教えている。

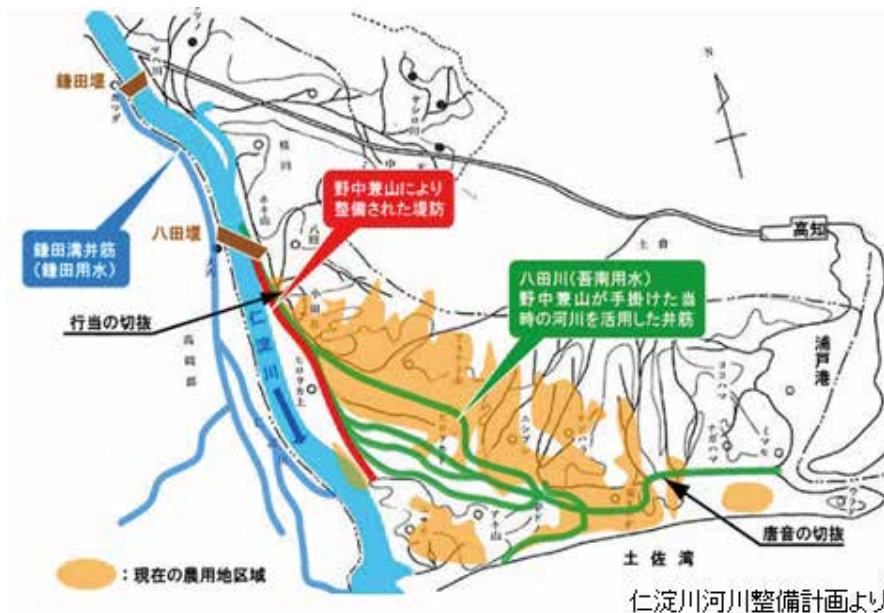


図 1 野中兼山が整備したとされる堰、用水、堤防（出典：仁淀川河川整備計画）

次に愛媛県の代表的な渇水・利水に関する防災風土資源の事例を 2 つ選び、以下に述べる。

## ウ) 愛媛県の代表的な渇水・利水に関する防災風土資源の事例

### ① 菖蒲堰の四カー水（しかいちみず）（東温市）（表 6 の番号 9）

重信川の上流の愛媛県東温市には、菖蒲堰（しょうぶぜき）（写真 1、2）がある。昔そこから田んぼの水を取っていた。菖蒲堰には、上堰と下堰があった。渇水時には、上流の上堰で水と取ってしまうので、下流の下堰では水が取れなくなってしまうことが度々あった。堰からの取水は当時の農民にとっては死活問題で、水争いが繰り返されてきた。そうした対立の中で、水を分け合う取り決めが生まれた。その取り決め、約束が「大落水（おおおちみず）」という慣行である。これは、下堰側の地区で用水が不足して、番水制度を実施しても満たされない時に、上堰の地区に請求して、その分水の一部を受益するというものであった。下堰門樋前に分水を立てて水量を計りながら、四